第 60 回（一社）比較統合医療学会学術大会
第 20 回日本補完代替医療学会学術集会
一般講演 32

犬猫の病理検査の統計的な情報および医学領域と異なる犬猫の疾患

Statistical review of pathological examination in dogs and cats and difference between diseases in humans and small animals

難波裕之
Hiroyuki NAMBA
難波動物病理検査ラボ
Namba Veterinary Pathological Laboratory

目的

小動物臨床獣医師へ向け、簡単に腫瘍などの発生傾向をまとめた。また、臨床現場へ確定診断を提供する上で重要となる「塗抹標本上での細胞形態」について実例を紹介し、そうした組織検査前あるいは実施時に、塗抹標本がどれだけ提供されているか、その割合を提示する。

そして最後に、医学領域と獣医学領域とで異なる疾患の例を 4 例紹介する。

目次

1、 病理診断の統計的な情報の紹介
2、 細胞診・生検を経て外科手術を行う有用性
3、 塗抹標本が組織よりも診断上有用であった疾患
4、 医学領域の分類とは異なる腫瘍

内容

下記番号は目次の項と対応

1、 犬と猫、メスとオスの検査数
　犬のメスの症例が多い理由は乳腺腫瘍
　乳腺腫瘍の良性・悪性と避妊の有無
　悪性診断される年齢の分布
　細胞診、生検、全切除の比率
　細胞診、生検での腫瘍・炎症の比率
2、 切除後に肥満細胞腫と診断された乳腺部腫瘤
3、 高グレードリンパ腫の診断

組織標本では細胞形態の把握が難しく、由来の特定が困難であったものが、塗抹標本にて容易に識別された症例。

4、 犬猫の IBD
　犬の血管周皮腫
　犬の皮膚組織球腫（と年齢分布の変遷）
　肥満細胞腫

考察

10 年前の症例数が非常に少なかったことから、2012 年時との比較となってしまったが、この期間内では、昨今話題となっている猫の飼育頭数が犬のそれを上回ったことの影響は見えなかった。

一方、犬と猫の飼育頭数が同数程度となっている状況にあっても、病理検査の依頼数として、猫は全体の 1／4 程度にとどまっていた。今後猫の飼育頭数が増え、犬が減っていくとの見通しが立っていることから、動物病院の経営という面で不安が残る。

また今回データとしては提示できないものの、昨今の傾向として、大型病院での外科手術の実施が多くなっている状況が見てとられる。今回、細胞診や組織生検が病理依頼件数のうちのそれぞれ 30％、5％ほどにとどまっている点や、乳腺部腫瘤に対して FNA を行わずに外科切除を実施して、結果的に肥満細胞腫でマージンが不足していた、といった実例がみられたことからは、今後一次診療に特化した病院においても、炎症性病変などを鑑別して症例を効率良く二次施設などへ紹介する目的などで、細胞診や組織生検を積極的に実施していくことが勧められる。なお、組織生検を実施された際に、FNA 標本や病変部のスタンプ標本を同時に検査へ提供していただくことは、特にリンパ腫診断において重要であるということを繰り返し述べさせていただく。

最後に、病理組織学においても、小動物領域にみられる疾患について医学領域での膨大な知見との摺合せを行っていくことは、疾患の本態を知り、より良い治療法を模索していくうえで非常に重要なことと思われる。犬猫の IBD にみられるように、医学領域での疾患と異なる組織像を呈するような疾患について、今後も比較検討が必要かと思われる。